

# 主 論 文 要 旨

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	和 田 彩 子
<b>主 論 文 題 名</b>				
Development of a new scale for dysphagia in patients with progressive neuromuscular diseases: the Neuromuscular Disease Swallowing Status Scale (NdSSS) (進行性神経・筋疾患患者の嚥下障害に対する新しい尺度の開発：神経・筋疾患摂食嚥下状況スケール (NdSSS) )				
<b>( 内 容 の 要 旨 )</b>				
<p>進行性の神経・筋疾患患者にとって嚥下障害は生命予後にも関わる大きな問題である。しかし、嚥下障害に対する既存の評価尺度は、脳卒中を主な対象として作成され、神経・筋疾患例における信頼性・妥当性・反応性が検証されておらず、また神経・筋疾患の特徴である障害の進行性を想定していないため、臨床的に使用するには限界があった。本研究の目的はこの問題を解決する新しい評価尺度である神経・筋疾患摂食嚥下状況スケール (Neuromuscular Disease Swallowing Status Scale; NdSSS) を開発し、その信頼性、併存的妥当性、反応性を評価することである。</p> <p>NdSSSは進行性の摂食嚥下障害の経過を反映し、神経・筋疾患に汎用性のある評価尺度として開発された。8段階の順序尺度であり、障害の進行に伴い摂食状況が変化する状況を捉えられ、既存尺度にはなかった補助栄養食品を経口摂取する時期の階層を有し、また最重度障害である自己の唾液嚥下能力の喪失を評価に反映できることを特徴としている。</p> <p>NdSSSの検者間／検者内信頼性は、Duchenne型筋ジストロフィー症患者(Duchenne muscular dystrophy: DMD) 50名および筋萎縮性側索硬化症患者(amyotrophic lateral sclerosis: ALS) 84名において<math>\kappa</math>係数を用いて評価した。併存的妥当性については、DMD 134名およびALS 84名において、それぞれ既存尺度であるFunctional Oral Intake Scale (FOIS) およびFunctional Intake LEVEL Scales (FILS) との関係をSpearmanの順位相関係数を用いて評価した。さらに、ALS例においてはALS Functional Rating Scale-Revised Swallow (ALSFRS-R Sw) との相関関係も検討した。また、NdSSSの反応性をDMD 60名では平均2年間の間隔で、ALS 28名において平均10か月間の間隔で2回評価し、standardized response mean (SRM) を用いて検証した。</p> <p>その結果、検者間／検者内信頼性の<math>\kappa</math>係数は、いずれも0.95以上と高い信頼性を示した。併存的妥当性の評価では、NdSSSは既存尺度との相関係数がいずれも0.85以上と強い相関を示した。反応性については、DMDのSRM0.65は他の既存スケールより大きく(FOIS 0.43, FILS 0.39)、ALSのSRM1.21は他の既存スケールとほぼ同等であった。</p> <p>以上、今回開発したNdSSSは、DMDとALSにおいて高い信頼性、併存的妥当性、反応性を示したことから、病状の進行が急速／緩徐に関わらず、進行性の神経・筋疾患患者における摂食嚥下障害の評価に活用できることが示唆された。</p>				